

1. 令和3年度調査および結果の特徴

令和3年度調査は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2年ぶりの実施となった。今年度においては、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、可能な限り、多くの児童生徒が同じ条件で参加できるよう、例年より約1ヶ月遅れの日程で実施された。

教科調査は、国語、算数・数学について実施し、小学校においては、新学習指導要領が全面実施されてからの初めての調査となった。平成31年度より、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、小学校及び中学校においても、知識・活用を一体的に問う調査問題となっている。

今回の調査結果から、これまでの調査で見られた課題について改善傾向が見られたものがある一方、「複数の文章や資料等を結びつけて必要な情報を見つけること」や「日常の事象を表、式、グラフなどを用いて数学的に解釈したり、説明したりすること」などに、依然として課題が見られた。

児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育活動における取組の成果と課題を検証し、その改善を図っていく必要がある。

小学校及び中学校の調査結果は次のとおりである。

[小学校]

	課題が見られるもの	概ねできているもの
国語	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて、文章と図表を結びつけて必要な情報を見つけること。 目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること。 目的や意図に応じて、理由を明確にしなが、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。 文の中における修飾と被修飾との関係をとらえること。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて、話の内容が明確になるように、スピーチの構成を考えること。 目的や意図に応じて、資料を使って話すこと。 思考に関わる語句の使い方を理解し、話や文章の中で使うこと
算数	<ul style="list-style-type: none"> 小数を用いた倍についての説明を解釈し、ほかの数値の場合に適用して、基準量を1としたときに比較量が示された小数にあたる理由を記述すること。 三角形の面積の求め方について理解すること。 二等辺三角形を組み合わせた平行四辺形の面積の求め方を記述すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 示された除法の結果について日常生活の場面に即して判断すること。 棒グラフから、数量や項目間の関係を読み取ること。 集団の特徴を捉えるために、どのようなデータを集めるべきかを判断すること。

[中学校]

	課題が見られるもの	概ねできているもの
国 語	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係に注意して書くこと。 ・文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話合いの話題や方向を捉えること ・話合いの中での質問の意図を捉えること。 ・伝えたい事柄が相手に効果的につたわるように書くこと。
数 学	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的な事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること。 ・2つの分布の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明すること。 ・ある条件の下で、いつでも成り立つ図形の性質を見だし、それを数学的に表現すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・整式の加法と減法の計算。 ・与えられたデータから中央値を求めること。 ・与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ること。

上記の分析結果は、全国の各設問の平均正答率や正答数分布の状況等から明らかになったことであり、この平均正答率や正答数分布は、熊取町と全国、大阪府との間で若干の差はあるものの、概ね同じ傾向にある。(次頁の正答数分布図参照)

したがって、これらの結果の特徴や課題は、熊取町を含め小学6年生及び中学3年生全体の課題であると言える。

また、熊取町の平均正答率を全国の結果と比較すると、小学校、中学校ともに国語は下回り、算数・数学は上回った。

大阪府との比較では、小学校においては、国語、算数とも上回り、中学校では国語は同程度で、数学は上回った。

2. 学力調査から明らかになった課題と今後の取り組み

(1) 国語の課題

今回実施された「令和3年度全国学力・学習状況調査」における国語の状況については、小学校国語において全国平均を下回り、大阪府平均を上回る結果となった。中学校国語においては全国平均を下回り、大阪府平均とほぼ同様の結果となった。

小学校の領域・観点別平均正答率の比較では、「話すこと・聞くこと」「読むこと」において全国・大阪府平均を上回る結果となった。「書くこと」においては全国・大阪府平均を下回り、「言葉の特徴や使い方に関する事項」については全国平均を下回り、大阪府平均を上回る結果となった。これらの観点・領域の設問を個々に比較すると、全国を上回る設問もあった。

中学校の領域・観点別平均正答率の比較では、「話すこと・聞くこと」「読むこと」は全国を下回り、大阪府を上回った。「書くこと」は全国を下回り、大阪府と同様の結果となった。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、全国・大阪府を下回る結果となった。無解答率については、おおむね全国・大阪府より低い結果となった。

小学校では、今年度も引き続き記述式の「書くこと」に課題が見られた。令和3年度は「目的や意図に応じて、理由を明確にし、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」について課題が見られたが、平成31年度は「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと」、平成30年度は「目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書くこと」「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること」が課題として挙げられた。また、選択式で問われた「言葉の特徴や使い方に関する事項」にも課題が見られた。「文の中における主語と述語との関係を捉える」設問、「文の中における修飾と被修飾との関係を捉える」設問では、平均正答率が全国・大阪府を下回る結果となった。

中学校では、「伝えたい事柄が相手に効果的に伝わるように書く」（書くこと）、「相手や場に応じて敬語を適切に使う」（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）、「話し合いの話題や方向を捉えて、話す内容を考える」（話すこと・聞くこと）において、平均正答率が全国を大きく下回った。これらの設問は、いずれも短答式または記述式であった。

(2) 国語の学力向上に向けての方策

(1) に挙げた課題を踏まえ、「自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫すること」について、指導事項の系統性及び国語の授業を改善するための方策を示す。

○自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫すること

自分の考えが相手に伝わるように書くためには、まずは自分の考えを明確にした上

で、その構成を検討する必要がある。筋道の通った文章となるように文章の構成や展開を考えた上で、書き表し方を工夫していく。その中で、自分の考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか（文末表現、敬体か常体か等を含む）、語や文及び段落の続き方やつながりをどのように表現するか、といったことなどに留意して、記述の仕方を考えることが大切である。その際、それぞれの学年において、次のことを踏まえて指導することが効果的である。

第1学年及び第2学年

事柄の順序に沿いながら、文や文章の中で、語と語及び文と文との続き方を考えて記述し、自分の考えを一層明確にしていくことを示している。

語と語や文と文との続き方に注意するとは、前後の語句や文のつながりを大切にし、一文の意味が明確になるように語と語との続き方を考えるとともに、離れたところにある語と語や文と文とのつながりについても考えて記述することである。

内容のまとまりがわかるように書き表し方を工夫するとは、順序に沿って考えた構成を基に、内容が混在しないようにまとまりを明確にした記述の仕方を工夫することである。時間や事柄の順序を表す語を適切に用いたり、内容のまとまりが明確になっているかを確認めながら書いたりすることが重要になる。

第3学年及び第4学年

第1学年及び第2学年を受けて、自分の考えなどが明確になるように書き表し方を工夫することを示している。第3学年及び第4学年においては、自分の考えとそれを支える理由や事例といった関係性が明確になるように記述することに重点を置いている。

考えを支える理由を記述する際には、「なぜなら～」、「その理由は～」、「～ためである」など、理由を示すことを明確にする表現を用いることができるようにことが求められる。

事例とは、書き手の考えをより具体的に説明するために挙げられた事柄や内容のことである。考えを支える事例を記述する際には、「例えば～」、「事例を挙げると～」、「～などがそれに当たる」などの表現を用いることができるようにすることが求められる。

また、例えば、〔知識及び技能〕の(1)「キ 丁寧な言葉を使うとともに、敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。」における、相手や目的に応じて敬体と常体とを意識的に使い分けることや、書いていくときに「だ」、「である」、「です」、「ます」などの文末表現に注意して書くことの指導との関連を図ることも有効である。

第5学年及び第6学年

第3学年及び第4学年を受けて、簡単に書いたり詳しく書いたり、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することを示している。第5学年及び第6学年においては、目的や意図に応じて簡単に書く部分と詳しく書く部分を決めたり、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、書き表し方を工夫することに重点を置いている。

目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとは、書く目的や意図を明確にした上で、詳しく書く必要がある場合や簡単に書いた方が効果的である場合などを判断しながら書き表し方を工夫することである。構成や展開を考える過程において、文章のどこを詳しく、どこを簡単に書けば効果的かをあらかじめ検討しておくことも考えられる。

事実と感想、意見とを区別して書いたりするには、事実を客観的に書くこととともに、その事実と感想や意見との関係を十分捉えて書くことが重要である。それは、自分の考えたことなどが客観的な事象に裏付けられたものになっているかどうかを振り返り、自分の考えをより深めていくことにつながるからである。また、事実と感想、意見とを明確に区別して書くためには、文末表現に注意することも重要である。

記述の仕方を工夫し、自分の考えが伝わる文章にすることを示している。

第1学年では、根拠という概念があることを理解した上で、根拠を明確にしなが、第2学年では、根拠が自分の考えを支える上で適切かどうかを考えなが説明や具体例を加えたり、表現の効果を考て描写したりするなど、第3学年では、表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなどして記述することを示している。

【中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編】より

(3) 算数・数学の課題

今回実施された「令和3年度全国学力・学習状況調査」における算数・数学の状況について、小学校、中学校ともに、大阪府平均・全国平均をともに上回る結果となった。

小学校においては、「数と計算」、「図形」、「測定」、「変化と関係」、「データの活用」とすべての学習指導要領の領域で大阪府平均・全国平均を上回っている。

「図形」の領域においてはおおむね理解できているものの、「直角三角形の面積を求める式と答えを書く」の問題で課題が見られた。

また、問題形式「選択式」、「短答式」、「記述式」の正答率は、すべての区分で大阪府平均・全国平均を上回っている。また、「短答式」、「記述式」の各問題での無解答率はすべての問題で大阪府平均・全国平均を下回っており、「選択式」においてもほぼ大阪府平均、全国平均と変わらない結果である。無解答率が0%の問題もあり、すべての児童が積極的に解答しようとしたと考えられる。

問題形式においては、選択式や記述式に比べ、短答式の解答に課題が見られた。領域別では、「図形」領域と「データの活用」領域に課題がみられた。

総じて、考えられる課題は以下のとおりである。短答式の解答が他の問題形式に比べて正答率が低いことから、「問題に正対し、端的に記述すること」に課題がみられる。また、課題のある領域に共通して「問題の意図をつかみ、解答に必要な情報を選択すること」に課題が見られる。

中学校においては、学習指導要領の領域である「図形」、「資料の活用」が大阪府の平均を上回っているものの、全国の平均を下回った。「データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる」、「平行四辺形になるための条件を用いて、四角形が平行四辺形になることの理由を説明することができる」の問題で課題が見られた。

記述式の各問題での無解答率はすべての問題で大阪府の平均を下回っており、全国の平均よりも上回っているのは「短答式」の2問であった。前回調査で文章で表現することに課題が見られたが、多くの生徒が積極的に解答しようとしたと考えられる。

これらのことから、小学校・中学校とも、一部の問題については課題が見られたが、多くの児童生徒が内容を理解し、積極的に解答しようとしていた。算数・数学においては学習内容の系統性が高いことから、小学校・中学校の系統性を意識し、数学的活動を通して言語活動の充実とともに、数学的な表現の充実に向け今後も授業改善を続けていく必要がある。

令和3年度の児童生徒質問紙調査では、「算数・数学の勉強は好きですか」の質問に、肯定的な回答をした児童生徒の割合は全国・大阪府より高くなっている。

調査対象生徒は、平成30年度調査実施時には小学6年生であった。そこで平成30年度と令和3年度結果の比較について考える。平成30年度の小学6年時、児童質問紙調査の算数に関する項目で「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしていますか」、「今回の算数の問題について、言葉や数、式を使って、わけや求め方など

を書く問題がありましたがどのように解答しましたか」の2問が、大阪府平均・全国平均の両方で下回っている。

算数に関するほとんどの項目での質問に、肯定的な回答をした児童の割合が全国・大阪府より高くなっている。しかし、中学校においては、「数学の勉強は好きですか」に対する肯定的な回答は多くみられるが、その他の「数学の授業の内容はよく分かりますか」、「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」等の質問に、肯定的な回答をした生徒の割合が全国・大阪府より低くなっている。

これらのことから、授業における課題設定をより生活と関連づけ、児童生徒の実態に合わせていくことが求められる。

(4) 算数・数学の学力向上のための方策

小学校、中学校に共通して、児童生徒の説明する力、表現力に課題が見られる。また、特定の領域で、課題を把握し、必要な情報を活用し、解決に導くことが難しいという課題が見られた。

そこで、それらの力を育み、算数・数学の学力向上の方策を以下に5点示す。

1. 「目的をもって見通しを立てたり、結果を振り返ったりする」指導の充実

そのため、下記の学習過程の充実により一層取り組んでいかなければならない。

【授業づくりのポイントを5つの段階にわけた学習過程】

- | | |
|----------|----------------------|
| ①出 合 う | 課題を積極的に受け止め、意欲的に向き合う |
| ②結び付ける | 既存・既習の知識・技能と結びつける |
| ③向 き 合 う | 自分の力を頼りに一人で課題に向き合う |
| ④つ な げ る | 友だちの考えをつなぎ、考えを深める |
| ⑤振 り 返 る | 自分の学びを振り返り、自己評価を行う |

【出典】 「大阪の授業STANDARD」 平成24年5月大阪府教育センター

「算数・数学が好き」という肯定的な回答をしている児童生徒が多くいる。再度、課題との①出合うことを大切に、課題を積極的に受け止め、意欲的に向き合えるような授業づくりが大切である。②結び付けるの場面において、既存・既習の知識・技能と結びつけるとともに、その知識・技能をつかって問題解決の方法と結果について見通しを立てることが大切である。またそこで立てた見通しをもとに、結果を振り返る活動を充実させていく必要がある。

例えば、問題解決の方向を話し合う場面で、式を用いて解決する方法を取り上げるのであれば、何についての式か、何を求めればよいかを確認する中で説明を洗練していくことも考えられる。その上で、予想した事柄について説明する活動を設定することが大切であ

る。また、予想する際には、正しい予想だけでなく、誤った予想も取り上げ、全体でそれらが正しいかどうかを説明していく活動を取り入れることが大切である。

2. 児童・生徒が主体的に関わり、表現する授業づくりの充実

形式的な計算・測定の処理だけでなく、日常の事象と関連付けたり、児童・生徒が主体的に関わる場面を設けたりすることが重要となる。そのためには、数学的活動の充実と、言語活動の充実が必要である。

③向き合うや④つなげるの場面では、解決へのプロセスをノートに記述したり、考えた内容を他者へと伝えたり、比較検討する活動が必要であると考えられる。

例えば、式の指導においては、単に計算するだけでなく、具体的な場面に对应させながら、事柄や関係を式に表すことができるようにする。さらに、式を通して場面などの意味を読み取り言葉や図を用いて表したり、式で処理したり考えを進めたりすることが大切である。さらに、式を、言葉、図、表、グラフなどと関連付けて活用し、他者に対して、自分の考えを説明したり、分かりやすく伝え合ったりできるようにすることが大切である。

3. 系統的・継続的な学びの充実

思考・判断したことを的確に表現することができるようにするために、系統的に数学的な思考力・表現力を高める指導計画を考える必要がある。校種間での内容の関連を捉え、授業で配慮・工夫すべきことを捉えることが重要である。

4. 目的を明らかにした数学的活動の充実をめざした指導

小学校・中学校に共通して、記述式の設問では、正答率が低い設問があることから、説明の内容に過不足があり、不十分であったと考えられる。そのため、算数・数学科においては、言葉や数、式、図、表、グラフなど算数・数学の言語を用いて、筋道を立てて説明したり論理的に考えたりといった数学的活動をとおして見方・考え方をはたらかせることができる場面設定をし、算数・数学のよさを児童生徒が実感することが重要である。

例えば「円の定義」を知る場面では、単にコンパスで円を描くのではなく、ある点から等距離に点を打ち、それらをなめらかな曲線でつなぐ活動をすることで円になることを体験的に学習することが重要である。それらの活動を記す場面では、算数・数学の言葉を使い表現することで、算数・数学のよさを感じることができる。

これらの上記1～4の方策が、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながるものと考えられる。

3. 児童生徒質問紙調査結果の分析

①基本的な生活習慣等

「朝食を毎日食べていますか」の質問に対して、小中学校ともに肯定的回答は9割程度で、大阪府、全国よりも低い。「毎日、同じ時間に寝ていますか」の質問に対して、小学校の肯定的回答は8割に届かず大阪府、全国よりも低い。また、中学校の肯定的回答も8割に届かず大阪府、全国よりも低い結果であった。「毎日、同じぐらいの時間に起きていますか」の質問に対しては、小学校の肯定的回答は約9割であり、大阪府、全国よりもやや高い。中学校においては約9割が肯定的回答を示しているが、大阪府、全国よりも低い結果であった。

「新型コロナウイルスの感染症の拡大で多くの学校が休校していた期間中、規則正しい生活を送っていましたか」の肯定的回答は約4割を超える程度であり、大阪府より高いものの全国よりも低い結果となっていた。

令和3年度の熊取町の基本的な生活習慣等に関する調査結果を、平成31年度の熊取町の調査結果と比較すると、小学校では「朝食を毎日食べている」の肯定的回答は大阪府、全国ともに減少傾向であるが、熊取町においても減少している。「毎日、同じぐらいの時刻に寝ている」の肯定的回答は大阪府、全国ではほぼ変化がなかったが、熊取町においては大きく減少している。「毎日、同じぐらいの時刻に起きている」の肯定的回答の割合は大阪府、全国の傾向と同様にやや減少している。

一方、中学校では、平成31年度の熊取町の結果と比較すると「朝食を毎日食べている」の肯定的回答はやや減少している。「毎日、同じぐらいに寝ている」と回答した生徒の割合は大阪府、全国の傾向と同様にやや増加しているが、「毎日、同じぐらいの時刻に起きている」と回答した生徒の割合は大阪府、全国はほぼ変化がなかったが減少している。

平成31年度、「朝食」「就寝時間」については、小中学校とも改善傾向であったが、今回の調査では児童の基本的な生活習慣に課題が見られた。休校期間中に生活リズムが乱れた児童生徒が半数以上いることについても確認された。

基本的な生活習慣の確立は、子どもがよりよく成長していく上で重要であり、特に、栄養・睡眠・運動の3つの要素は非常に大切である。児童生徒が、基本的な生活習慣等自らの生活について自覚するとともに、学校と家庭が協力することや保護者がその重要性を理解することが大切である。

②挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等

「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に対して、小学校の肯定的な回答の割合は、7割程度である。また、中学校においては7割に届かず、小中学校ともに大阪府、全国よりも低い。平成31年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では8.8ポイント、中学校では1.4ポイント減少した。学力調査結果との関連性については、小中学校と

もに相関関係は見られなかった。

「将来の夢や目標を持っていますか」については、小学校の肯定的回答は約8割であり、大阪府よりもやや高く、全国よりもやや低い。中学校においては6割程度で、大阪府や全国よりも低かった。平成31年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では6.1ポイント、中学校では8.5ポイント減少した。

「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」については、小中学校ともに肯定的回答は8割を超える結果であった。小学校では大阪府より高く、全国よりもやや高い。また中学校では大阪府よりやや高く、全国よりも低い。

「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか」については、小中学校ともに肯定的回答は約7割であった。小学校においては大阪府、全国よりも低い。中学校においては大阪府全国よりも高い結果であった。

「人が困っているときは、進んで助けていますか」については、肯定的回答の割合は、小学校で9割を超え、大阪府や全国より高い。中学校では8割を超えているが、大阪府や全国より低い。平成31年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では1.7ポイント、中学校では1.8ポイント増加している。

「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」については、肯定的回答の割合は、小学校で97.4%、中学校では93.3%であった。平成31年度の熊取町の結果と比較して、小学校では1.4ポイント、中学校では0.6ポイント減少している。小学校では2.6%、中学校では6.7%の児童生徒「どちらかといえば当てはまらない」、「当てはまらない」と回答しており、これらの児童生徒への対応が課題である。

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の質問については、肯定的回答の割合は、小学校においては96.6%で、大阪府、全国よりも高かった。一方、中学校においては91.8%で、大阪府、全国よりも低かったが、平成31年度の熊取町の結果とほぼかわらない。

自尊感情は幼少期からの様々な体験や、成就感、達成感等を味わうことにより育まれるものである。前回調査から減少した結果を踏まえて、その要因を捉えるとともに、児童生徒一人ひとりを大切にしながら日常の教育活動を行い、保護者、地域に対してもその必要性を啓発することが必要である。

学校生活や社会生活を営む上で、規範意識を身につけることは必要不可欠である。学校の日々の取り組みや、家庭、地域との連携を図ることにより、児童生徒の理解の促進や意識改革に取り組むことが重要である。社会全体の規範意識の低下が叫ばれる中、学校のみならず、家庭、地域の大人が現状をしっかりと認識し、率先して規範意識を守ることの大切さを子どもに示すことが必要である。

引き続き、学校や家庭において、自分の役割を果たすことで周りから感謝されたり、達成感を味わったりする機会を充実させていくことが大切である。

③学習習慣、学習環境等

「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む）」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は約7割で、大阪府より高く、全国よりも低い。一方、中学校においては、肯定的な回答は約6割で、大阪府よりもやや高く、全国よりも低い。大阪府、全国との比較では、小中学校とも同じような傾向にある。また、前回調査との比較では、小学校では、肯定的回答が1.5ポイント高く、中学校では13.2ポイントも高かった。ただし、中学校については、当該生徒が小学校時代の平成30年度の調査と比較すると1.9ポイント低くなっている。

「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強していますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」の質問について、学力とのクロス集計の結果、小学校において、勉強する時間が長いほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られた。

「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしていますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」の質問については、学力とのクロス集計の結果、小中学校とも、勉強をする時間が長い児童生徒ほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られた。

「あなたの家には、およそどれくらい本がありますか（雑誌、新聞、教科書は除く）」の質問について、学力とのクロス分析において、小中学校とも家にある本の冊数が多い児童生徒ほど、教科の平均正答率が高い傾向にあった。

学習習慣に関する調査結果から、日頃から学習時間をしっかり確保し、家庭内での学習や読書環境等の整備が学力に影響していることが明らかとなった。また、計画的な学習は、学習時間の確保にもつながる。小中学校とも計画的な学習については、家庭での自主学習等を促すなど取り組みを進めているが、今後さらなる工夫を行う必要がある。

④地域や社会に関わる活動の状況等

「今住んでいる地域の行事に参加していますか」、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることはありますか」の質問については、小中学校いずれも肯定的回答が全国平均とほぼ同じであり、大阪府よりも高かった。この2つの質問の肯定的回答は、小学校で約55ポイント、中学校で約40ポイントであった。前回調査との比較では、小学校では、両方とも肯定的回答率が大幅に下がったが、中学校においては、「行事への参加」はやや低く、「何をすべきか考える」は約7ポイント高くなった。

新型コロナウイルス感染症拡大により、地域の行事が中止になったり、学校行事においても地域の方々と交流する機会が減少したりしたことが原因のひとつと考えられる。しかし、中学校では行事が中止や変更になった際も「どうすればいいのか」「自分達には何ができるか」と自分事として取り組んだ成果が見られたと考えられる。今後もあらゆる教育活動の中で、発達段階に応じて、地域や社会の一員としての自覚を育てていく必要がある。

⑤ ICTを活用した学習状況

「小学5年生までに受けた授業で、コンピュータなどのICT機器を週1回以上使用した」と回答した割合は3割程度で、全国、大阪府より低い結果となった。一方、「中学1,2年生の時に受けた授業で、コンピュータなどのICT機器を週1回以上使用した」と回答した中学生の割合は4割程度となり、全国、大阪府より高い結果となった。

令和3年度より新たに調査した内容については、次のとおりである。

「コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために、週1回以上使用している」と回答した小学生は、3割弱で、全国、府より低い結果となった。一方、中学生の回答は、4割程度となり、全国、大阪府より高い結果となった。

「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思うか」については、小中学生ともに9割以上の肯定的回答となり、全国、大阪府と同程度となっている。

「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりスマートフォンやコンピュータなどのICT機器を勉強のために使っている」と回答した割合は、小中学校ともに全国、大阪府と同程度であった。

GIGAスクール構想に伴って配備されたクロームブックの活用が、令和2年度の3学期から始まり、小中学校において全ての教育活動で活用が期待できる。全ての学習の基盤となる資質・能力とされる情報活用能力の育成のために、どの教科のどの場面で活用することが効果的なのかを研究し続ける必要がある。

⑥主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳

クロス集計結果より、小学校では「5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか」「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の質問において、また、中学校では、「1,2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか」「1,2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の質問において、肯定的回答をしている児童生徒ほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られた。

「5年生まで（1,2年生のとき）に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか」「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の勸化を深めたり、広げたり

することができていますか」は対話的な学習、「5年生まで（1，2年生のとき）に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」は主体的な学び、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」は振り返りを行い次の時間の学習につなげる状況を問うたものである。この結果から、日々の授業の中で「主体的、対話的で深い学び」となるような授業を行うことが必要であることが改めて確認された。

本町の小学校では、「5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか」の肯定的回答が6割に満たず、全国、大阪府よりも低かった。また、「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」については、肯定的回答が約8割で全国、大阪府よりも高かった。また、「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の肯定的回答は約75ポイントで全国より低く、大阪府よりも高かった。

一方、中学校では、「1，2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか」の肯定的回答は約65ポイント、「1，2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の肯定的回答は8割を超え、ともに、全国、大阪府よりも高かった。「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の肯定的回答は、全国とほぼ同じで、大阪府よりも高かった。「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」については、全国よりも低く、大阪府よりも高かった。

各校において、めあてを明確にし、対話を通して学びを深め、振り返りにより自分の学びを確認することを大切に、授業改善を進めている。その成果があらわれつつあると考える。

今後も、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、各校での校内研究や熊取町における教職員研修を充実させ、より一層、授業の工夫改善に取り組むことが必要である。

⑦ 学習に関する興味・関心や授業の理解度等（英語）

「英語の勉強は好きですか」の質問について、小学校では肯定的回答が約7割で全国、大阪府よりも高かった。しかし、中学校では肯定的回答が5割に満たず、全国、大阪府よりも低かった。「5年生まで（1，2年生のとき）に受けた英語の授業では、英語で自分自身の考えや気持ちを伝え合うことができていましたか」の質問については、肯定的回答が小学校では約7割、中学校では6割強であり、ともに全国、大阪府よりも低かった。「これまで、学校の授業以外で、英語を使う機会がありましたか（地域の人や外国にいる人と英

語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、英会話教室に通うなど)」の質問では、小学校の肯定的回答は約5割で全国、大阪府よりも高かった。中学校では、約35ポイントで全国よりも高く、大阪府よりもやや低かった。

これらのことから、小中学校とも授業等において、英語で自分の考えや気持ちを伝え合う機会を増やすよう工夫することが必要である。一方で、日常的に英語を使う機会については、小中学校とも全国よりも高い傾向にある。今後もALTを十分に活用し、英語に親しむ機会を増やしていきたい。

⑧新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症にかかる質問は、今回初めて実施されたものである。

小中学生ともに、「新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、勉強について不安を感じましたか」の質問に、5割程度「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。

「新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、計画的に学習を続けることができましたか」の質問に対しては、小学生では6割程度、中学校では4割程度「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。「新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、規則正しい生活を送っていましたか」の質問についても、上記の質問と同様の回答割合であった。

「新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、学校からの課題で分からないことがあったとき、どのようにしていましたか（複数選択）」の質問については、小学生では「家族に聞いた」割合が一番高く、次いで「自分で調べた」「友達に聞いた」という回答の割合が高かった。一方、中学生では「自分で調べた」の回答が一番高く、次いで「家族に聞いた」「友達に聞いた」の回答の割合が高かった。「先生に聞いた」という回答割合は、小中学生ともに1割程度の回答であった。

以上のことから、今後の休校等に備え、子どもたちの学習への不安を軽減するために、クロームブックを活用し、オンライン授業や学習を進めていく必要がある。

令和2年3月に全国一斉休校が行われ、小中学校ともに学習面や生活面における年度末のまとめを当初の計画どおりに行えなかった。引き続き、令和2年度も全国一斉休校の中で開始され、6月から通常形態での学校生活が始まった。

休校期間中は、学習課題に加え、児童生徒に向けたメッセージを盛り込んだ学校だよりや学年だより等の郵送やポスティングを行う等、児童生徒の発達段階に合わせた学習保障と心のケアを行った。

質問紙の回答結果から、児童生徒の心理的な変化が学習面や生活面に見られることから、今後も学習の習得状況や心身の状況の把握に努め、1人ひとりに寄り添った指導や支援、心のケアを継続的に行っていく必要があると考える。